

TOKAS Project Vol.1

Institute of Asian Performance Art: Tokyo

日/中/韓 パフォーマンスとメディア 70's - 90's



2018年10月13日(土)～11月11日(日)

トーキョーアーツアンドスペース本郷



— 東アジアのパフォーマンス・アートとメディアの再考

トーキョーアーツアンドスペース(TOKAS)では、2001年の開館以来、海外のアーティストやキュレーター、アートセンターや文化機関などと協働して展覧会や関連プログラムを実施してきました。2018年より、多文化的な視点を通じ、アートや社会など、様々なテーマについて思考するプログラム、TOKAS Projectを開始します。

初回となる TOKAS Project Vol. 1 では、ロンドンと上海を拠点に活動するキュレーター、ヴィクター・ワンを迎え、日本、中国、韓国3名のビデオアートの先駆者たちを紹介し、パフォーマンス・アートとメディアを考察する展覧会「Institute of Asian Performance Art: Tokyo」を開催します。

■ 展覧会概要

展覧会名: Institute of Asian Performance Art: Tokyo 日/中/韓 パフォーマンスとメディア 70's - 90's

英語タイトル: Institute of Asian Performance Art: Tokyo

会期: 2018年10月13日(土)～11月11日(日)

会場: トーキョーアーツアンドスペース本郷 (東京都文京区本郷2-4-16)

開館時間: 11:00 - 19:00 (最終入場は30分前まで)

休館日: 月曜日

入場料: 無料

主催: トーキョーアーツアンドスペース(公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館)

キュレーター: ヴィクター・ワン (Victor Wang・中国/イギリス)

参加作家: 出光真子 (日本)、ジャン・ペイリー (Zhang Peili・中国)、パク・ヒョンギ (Park Hyunki・韓国)

協力: Boers-Li Gallery, Gallery Hyundai, The Estate of Park Hyunki, 東京藝術大学、David Roberts Art Foundation (DRAF)

ウェブサイト: <http://www.tokyoartsandspace.jp/>

GALLERYHYUNDAI

DRAF

< お問い合わせ >

〒135-0016 東京都江東区東陽7-3-5 東京都現代美術館リニューアル準備室3F

公益財団法人東京都歴史文化財団 トーキョーアーツアンドスペース 広報担当: 市川、竹野

TEL: 03-5633-6373 / FAX: 03-5633-6374 / E-mail: press@tokyoartsandspace.jp

■ 展覧会について

本展の企画者、ヴィクター・ワンは、東アジアにおけるパフォーマンス・アートの歴史と発展を調査しており、2017年 TOKAS レジデンス・プログラムに参加した際には、ハイレッド・センターやゼロ次元など、1960～70年代の前衛芸術活動をとおして、日本におけるパフォーマンス・アートの歴史を考察しました。

当時のアーティストたちは、従来とは異なる新しい表現としてパフォーマンスを模索する一方で、その一過性のパフォーマンスは映像や写真で記録され、作品として残るようになりました。

その後、彼らはビデオという当時では新しい技術を巧みに使い、西洋美術史の文脈にとらわれることなく、独自の美学とアプローチによって、自己や社会の変革を意識するような作品を制作するなど、表現の幅を広げていきました。

2018年9月にロンドンのディヴィッド・ロバーツ・アート・ファウンデーション(DRAF)でワンの企画による同タイトルの展覧会が開催され、高松次郎や平田実、キム・グリムら1950年代後半から70年代に活動したアーティストの作品が展示されます。DRAFでの展示に続き実施する本展では、日本、中国、韓国でビデオアートの先駆者とされるアーティスト、出光真子、ジャン・ペイリー、パク・ヒョンギの3名に焦点を当て、当時の作品を紹介しながら、現代へと繋がる潮流を辿ります。

内覧会

日 時：10月12日(金)18:00 - 20:00 (予定)
出 演：出光真子、ヴィクター・ワン、ジャン・ペイリー
会 場：トーキョーアーツアンドスペース本郷

■ 関連イベント

※参加クリエイターは変更となる場合がございます。予めご了承ください。日英通訳あり。

キュレーターと参加作家によるトーク

日 時：10月9日(火)18:30 - 20:30 (予定)
出 演：ヴィクター・ワン、ジャン・ペイリー ※日中逐次通訳あり
モデレーター：毛利嘉孝 (社会学者/東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授)
会 場：東京藝術大学 音楽学部 5-109 (東京都台東区上野公園 12-8)
主 催：トーキョーアーツアンドスペース、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科

※詳細は TOKAS ウェブサイトで発表します。

■ 本展キュレーター

ヴィクター・ワン Victor WANG

平成 29 年度芸術文化・国際機関推薦プログラム <2017 年 5 月 TOKAS 滞在>

■プロフィール

1983年カナダ生まれ。上海、ロンドンを拠点に活動。2014年ロイヤル・カレッジ・オブ・アート修了(コンテンポラリー・アート・キュレーティング)。主な展覧会に「Michael Dean: Analogue LOL」(ShanghART Gallery、上海、2018)、「Zhongguo 2185」(Sadie Coles HQ、ロンドン、2017)「Jac Leimer: Borders Are Drawn By Hand」(上海当代芸術館、2016)など。



■キュレーター・テキスト

Institute of Asian Performance Art: Tokyo

ヴィクター・ワン

「インスティテュート・オブ・アジア・パフォーマンス・アート(IAPA)」の第2弾では、トーキョーアーツアンドスペース(TOKAS)との共同で、芸術形式としてのビデオがアジアのアーティストにもたらした影響、そして中国や韓国、日本の先駆的なビデオアーティストたちが1970年代から1990年代にかけて行った種々の実験的なアプローチを探ります。

いわゆる「ビデオアート」と呼ばれるものの技法や系譜には、世界中に多くの系統や類型があり、その特徴や始まりはたいていの場合、音楽やパフォーマンス、ダンス、演劇、映画など他の時間芸術とつながっています¹。

ビデオアートの技法と形式は、技術の進歩に直結しており、西洋の美術史的伝統や、特定可能な言説に根ざした芸術技法ではありません。そのため、日本、韓国、中国のアーティストたちは、西洋の文脈の外から、多様な政治的、社会的状況のなかで、ビデオ制作に対する型にはまらない独自の美学とアプローチを展開し、形作ることができました。

TOKAS本郷で実施する本展覧会では、東アジアにおける地域間の対話と、パク・ヒョンギ、ジャン・ペイリー、出光真子らの先駆的なアーティストたちが発展させた技法に対する独自のアプローチに着目します。

影響力のある韓国のビデオアーティスト、パク・ヒョンギは地元・韓国のアートシーンへビデオアートを紹介しただけでなく² 東洋の哲学や文化に基づくパフォーマンスや彫刻と一体化させた特徴的な作品を作り出しました。パフォーマンスとインスタレーションに自然を取り入れた作品《Media as Translators (翻訳者としてのメディア)》(1982年)では、通常家の中にあるテレビを、数時間にわたり屋外に持ち出すことで商業的な機能を覆しました。そして、東洋的な文脈に基づく儀式や風景、脱物質主義、ミニマリズムの思想に向き合い、自然とテクノロジーの間に存在するある種の流動性について考察しました。

1979年のサンパウロ・ビエンナーレで発表された《Video Inclining Water (ビデオ 傾く水)》で、パクは水の映像が映し出されているビデオ・モニターを様々な方向に傾け、モニターに水が溢れているという錯覚を起こさせるようなパフォーマンスを行いました。映像と場所、自然、体の間を行き来させながら、パクはモニターを表現装置や素材として、あるいは技法の延長や展示コンテンツとして、ホワイト・キューブの内外で用いました。

1967~68年のソニー・ポータパックの登場やVHS方式の開発など、アジアにおける1960年代から70年代のポータブル・ビデオ・テクノロジーの台頭は、この地域のアーティストやクリエイターたちが媒体となるツールを手に入れるきっかけとなりました。中国では、発達した美術市場も、欧米との相互関係にも乏しい状況の中、アーティストたちは西洋のビデオアートが「1992年に体系的に中国に紹介される」より何年も前から、ビデオ作品を制作していました³。それ以前の中国では、外国のメディアや美術作品に関して、厳しい導入規制が敷かれていました。

¹ Chris Meigh-Andrews, *A History of Video Art*, Part 1, 2nd edn. (New York: Bloomsbury Publishing, 2014).

² National Museum of Modern and Contemporary Art, Korea Press release, 'Park Hyunki Mandala', January 27–May 25, 2015, National Museum of Modern and Contemporary Art, Korea" (Korea: NMMCA, 2015)

³ Barbara Pollack, 'Breaking and Entering: In His Videos, Zhang Peili Destroys and Restores to 'Capture and Emphasize Time'', *ARTnews* (5 May 2017).

ビデオを扱った最初の中国人アーティストとされるジャン・ペイリーは、視点や画面構成、とりわけ時間の感覚を巧みに操り、ガラスを割ったり、体を洗ったり、ひげを剃ったり、引っ掻いたりといった特定のありふれた動作の反復を、長時間または複数のモニターで連続するという、慣習にとられない映像撮影を行いました。

また、ジャンは、中国におけるコンセプチュアル・アートのパイオニアであり、中国人アーティストによる初のビデオアート作品として広く知られている《30 x 30》(1988年)では、30センチ四方の鏡を繰り返し割り続け、それを貼り合わせて戻すという緻密で単調な行為を通して、ビデオ技術によって複雑な時間操作の形を探求しています。ある意味では、初期のビデオアートにおけるパフォーマンス機能への問題提起とも言えます。作品について、ジャンは、「ビデオについて何かをしたり、何かを言ったりしたかったのだが、自分がパフォーマンスをしているという感覚もあった」と語っています。作品は観客のいないライブイベントの記録であり、自身が「ビデオとパフォーマンス」の両方であると述べるアプローチなのです⁴。

出光真子は、「日本におけるフェミニスト・アートの重要な先駆者」と評価されています⁵。1970年代から映画やビデオアートの実験的な作品を制作していた出光は、日本社会でジェンダーの影響が大きい場所として、家庭を取り上げています。例えば、1977年の作品《主婦の一日(Another Day of a Housewife)》では、家庭は、日本女性にとっての家事労働と生理的抑圧の場になっています。彼女のビデオ作品では、テレビのモニターが象徴的な主体として登場したり、主婦が日々の仕事をこなす様子を見ている外部的な主役としてしばしば登場します。《やすしの結婚(The Marriage of Yasushi)》(1986年)では、日本の世帯のなかで個人の私的な空間が、どのように家族の力学の下地となっていくのか、例えば母と息子、妻と夫のような相互関係、あるいはジェンダーに基づく労働分担が、どのように定められ、凝り固まっていくのかを探っています。これらの作品は、1960年代半ばから形成されてきた日本特有の社会情勢—「家庭の単位」が日本の経済発展と高度成長を支えてきた一方で、社会において男女間で労働の役割を分けたこと—に対する意見表明でもあるのです⁶。

テクノロジーに大きく依存する技法であり、地域の流通や発展、制作施設や設備へのアクセスが多様なため、この分野は特に歴史を整理するのが難しく、アジアに関する美術論上での「モダニズム」や「現代性」の議論では複雑な疑問が生じます。

一方で、アジアでビデオ作品を作るアーティストたちの実践を行き来することにより、アジアのビデオ史は、社会的、政治的、経済的、技術的、歴史的な関心や関係によってネットワーク化された一群として、文化圏におきまます認識されるようになっていきます。様々な場所と時間に出会い、組み合わせることで、地域内でより幅広い対話や連携が築かれます。そこには独自の起源や技法へのアプローチがあり、これらの歴史と実践をより広い世界に繋ぐ新たな道が生まれます。

⁴ Pollack.

⁵ 西嶋 憲生『心の神話 出光真子の映像世界』(<http://makoidemitsu.com/myth-of-the-heart-by-norio-nishijima/?lang=en>, accessed April 12, 2018)

⁶ 萩原 弘子『白々と明るいつくりものの家庭 — 出光作品の母・息子・娘』(<http://makoidemitsu.com/a-bright-shiny-fabricated-family-life/?lang=en>, accessed April 18, 2018)

■ 参加作家／略歴／広報用画像 ※この他にも広報用画像を用意しております。詳しくは広報担当までお問い合わせください。

出光真子 IDEMITSU Mako (日本)

日本でのフェミニズム・アート、実験映画の先駆者として知られる。1970年代からフィルムやビデオを用いた実験的な映像作品を制作開始。

■プロフィール

1940年出光興産創業者・出光佐三の四女に生まれる。お茶の水女子大学附属小・中・高から早稲田大学第一文学部に進む。卒業後ニューヨークに留学。抽象画家サム・フランシスと結婚。二児の母。妻であり母であることを超える創造表現への想いやみがたく、映像作家の道を歩む。自身の経験からフェミニズムをベースに、家庭における親と子、表現者として女性が生きる際の社会的摩擦などを問い続ける。

近年の主な展覧会に「恵比寿映像祭インヴィジブル」(東京都写真美術館、2018)、「MOMAT コレクション展」(東京国立近代美術館、2017)、「The EY Exhibition: The World Goes Pop」(テート・モダン、ロンドン、2016)など。著書に『ホワット・ア・うーまんめいどーある映像作家の自伝』(岩波書店、2003)など。



1. 《WOMAN'S HOUSE》16mm フィルム、1972

ジャン・ペイリー ZHANG Peili (張倍力・中国)

中国のビデオアートの先駆者、また中国現代美術史を画する八五美術運動(85 新潮)の中心人物として国際的に評価されているアーティスト。杭州の中国美术学院ニューメディアアート学部の創設にかかわり、また長年にわたり同学部で教鞭を執った教育者として、中国現代美術の発展における最も影響のある人物の一人でもある。コンセプチュアルな絵画作品を経て、映像、ニューメディア・インスタレーションや写真を表現手段として取り入れた。出展作品《30×30》は、中国初のビデオアート作品として知られている。

中国社会あるいはそれを越えた、個人と権力の関係を主題とし、初期作品では、倦怠の美学を用い、社会的、政治的支配をテーマとして扱っている。その作品は暗示的かつ政治的で、嘲笑的なトーンの中に痛烈なアイロニーが込められている。



2. 《30×30》 シングル・チャンネル・ビデオ、1988

■プロフィール

1957年杭州(中国)生まれ。杭州及び上海在住。近年の主な個展に「ジャン・ペイリー: Record. Repeat」(シカゴ美術館、2017)、主なグループ展に「芸術と中国 1989年以降: 世界の劇場」(グッゲンハイム美術館、ニューヨーク、2017-2018)、「Wrap Around the Time: Remembrance Exhibition for Nam Jun Paik's 10th Anniversary」(ナム・ジュン・パイク・アートセンター、京畿道、韓国、2015)、「Passage to History: 20 Years of La Biennale di Venezia and Chinese Contemporary

Art」(第 55 回ヴェネツィア・ビエンナーレ、2013)、「アヴァンギャルド・チャイナ―中国当代美術>二十年―」(国立新美術館、東京 / 国立国際美術館、大阪 / 愛知県立美術館 / 2008-2009)、「ハピネス:アートにみる幸福への鍵 モネ、若冲、そしてジェフ・クーンズへ」(森美術館、東京、2003)、「Alors, la Chine?」(ポンピドゥーセンター、パリ、2003)など。

パク・ヒョンギ PARK Hyunki (韓国)

韓国でビデオを本格的に芸術表現に導入したビデオアートの先駆者。作品の根底には東洋的な思想があり、同時に彼が否定してきた西洋的な価値観や形式言語との結合を試み、世界に遍在する静と動、聖と俗など、対極にある要素が共存することで発するエネルギーを作品化しようとした。ビデオという当時では新しい媒体を用いながらも、韓国の伝統的な世界観の表現に注力し、独自のスタイルを確立させた。

■プロフィール

1942年大阪府生まれ。1945年に韓国・大邱に移住。主な個展に「パク・ヒョンギ 1942-2000 曼荼羅」(国立現代美術館 果川館、韓国、2015)、「韓国ビデオアートの開拓者:パク・ヒョンギ:回顧展」(ギャラリーヒュンダイ、ソウル、2010)、主なグループ展に、「第3回光州ビエンナーレ」(韓国、2000)、「第1回光州ビエンナーレ」(韓国、1995)、「第15回サンパウロ・ビエンナーレ」(1979)など。2000年没。



3. 《Video Inclining Water》パフォーマンス記録写真、1979
© The Estate of Park Hyunki. Courtesy the estate and Gallery Hyundai.

TOKAS Project vol.1 [Institute of Asian Performance Art: Tokyo]
広報用画像申込書

Fax 番号: **03-5633-6374**

Email: **press@tokyoartsandspace.jp**

トーキョーアーツアンドスペース広報担当宛

(ご希望の広報用画像番号にチェックを入れてください)

1 2 3

掲載媒体名(特集・コーナー名)

種別 TV ラジオ 新聞 フリーペーパー ネット媒体 その他()

掲載/放送予定日 月 日 発売/放送(月号)

貴社名

ご担当者名

Tel

Fax

E-mail(画像データはメールでお送りします。必ずご記入ください)

画像到着希望日 月 日 時頃までに送付

※ご記入いただいた個人情報は、お問い合わせ及びご要望に対応させていただく目的のみ利用させていただきます。

※お急ぎの場合はメールもしくは、お電話でお問い合わせください。

【注意事項】

※画像データは申請時の目的以外での使用はできません。ご掲載や放送以外の目的での画像のご利用はご遠慮ください。また、申請時とは別の媒体での使用、再販等の場合は改めて申請してください。

※画像データは、メールにてお送りします。お手元に届くまで1~2日(土日祝休み)ほど頂戴いたしますのでご了承ください。

※作品画像は全図でご使用いただき、トリミング、文字載せはお控えください。必ず所定のキャプション等を併記してください。

※提供した画像データは、使用后速やかに破棄してください。画像が無断で第三者に利用されることのないよう、Web サイトへのご掲載は、画像にコピーガードや転載不可の明記をしてください。

※情報確認のため、事前に記事原稿をお送りください。

※取材の内容が収録された番組等はビデオ・DVD を一部、印刷物(掲載紙・雑誌)については現物を1部もしくはコピーの場合は3部ご送付ください。Web サイトの場合は、掲載時に URL をお知らせください。

<お問い合わせ> ※校正ゲラ及び掲載誌紙・DVD 等は下記宛にお送りください。

〒135-0016 東京都江東区東陽7-3-5 東京都現代美術館リニューアル準備室3F

公益財団法人東京都歴史文化財団

トーキョーアーツアンドスペース 広報担当: 市川、竹野

TEL: 03-5633-6373 / FAX: 03-5633-6374 / E-mail: press@tokyoartsandspace.jp

※トーキョーアーツアンドスペースは、平成29年10月1日よりトーキョーワンダーサイトから名称を変更しています。